

奈良女子大学
古代学学術研究センター

第6回月例研究会

日時：2010年12月8日（水）16：30～

場所：本部事務局棟3階第一会議室

内容：古代日本における口頭言語について

奥村 悦三（文学部 教授）

わたしたちは文献によってしか古代の日本語を知ることができません。しかも、それらは、中国で作られた中国語を記すための文字、漢字だけで書かれています。そこに、どのようなことが書かれているのか、どのようなことばが記されているのか、知ることは簡単ではありません。ところが、そのあるものについて、中国語（漢文）を記す文献にふつう見られない表現が見つかるということで、日本語が記されていると決めつけられます。古代日本人が自分の考えを表す古代日本語に引きずられ、漢文としてはありえない書き方をしたものだ、と考えられているのです。しかし、古代日本人が漢字を使って書き記すときに、その使用法を誤らせた、もっぱら口頭で用いられた、本来の日本語とはどのようなものだったのでしょうか。古代日本で書かれた漢字文献の《和習》の原因となった、その口頭言語がどのようなものだったと考えられるか、わたしなりの考えをお話ししたいと思っています。

ご自由にご参加ください